

肥前多久『御屋形日記』の中の石炭記事（一）

細川，章
多久市立図書館

<https://doi.org/10.15017/13621>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として．6，pp.53-54，1976-03-15．エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：



肥前多久『御屋形日記』の中の石炭記事 (一)

細川 章

肥前佐賀藩で多久邑の領主であつた多久家に残された記録資料の中に、天和二年（一六八二）から明治にかけて記された『御屋形日記』一〇一冊がある。他の日記類と共に、当時の多久を知る上で基本的な文書群である。

先頃、この『御屋形日記』の宝暦元年（一七五一）の項に「石炭」に関する記事を見出した。これまで佐賀藩内で宝暦年間に遡る石炭関係の記録を聞かないように思うので、何かの参考になればと此処に紹介してみたいと思う。

『御屋形日記』宝暦元年一月より同二年八月までの中より

「宝暦元年 十月廿三日

一大崎村之内大副山油石有之、石炭焼度由、福母村源太郎と申者相願付及吟味候処、御山方役中々見分被仕候様、御当役御中御山方被相達候事」

「（宝暦元年）十一月十七日

一大崎村大副山油石焼炭願指出候末、伺ニ相成、願之通被指免候段筋申達候事」

(1) はじめに「大副山油石」と出て来るが、当時多久地区でも石炭を油石と呼んだのか、頁炭を指しているのか、もつと別のものの呼称であるのか定かでないが、続いて「石炭焼度……」とあるので一応石炭と同質のものとして考えた。此処には採掘について何も触れてないので露頭の石炭であつたのだろうか。これは現在大崎町（大副山のある町名）に住む人の話でも、明治期には炭層も

浅く地表近く露出している箇所もあつたということであるから、初期に於ては露天採取が可能であつたものと思われる。

勿論当時佐賀領内で生の石炭を使用することは考えられなかつたので、当然のこととして焼炭を願出ている。

大副山は、年代は下るが本誌No.4の「『草場佩川日記』の中の石炭記事」に書いたように、天保二年（一八三一）正月にはお仕組山として本格的に採炭されている。「これは今まで『杵島郡便覧』（昭和二十九年刊）をはじめ大副山に関する記述の幾つかが天保八年にしているが、その根拠がはつきりしないので私としては『草場佩川日記』の記事を採りたい。」

また、かの有名な大崎八幡宮の炭坑絵馬を奉納した稗田麟蔵が多久家の命によつてこの大副山の採炭に着手するのは、嫡男市郎次が生れた元治元年（一八六四）といわれている。この時の炭坑や労働、石炭運送の様子は此の炭坑絵馬にまことに写實的に描き出されている。大副山は明治後期には多久出身の高取伊好によつて、福母と共に杵島坑業に組み込まれていく。

(2) 次に福母村（布久母とも書かれる）のことであるが、水江竜造寺である多久家の事蹟を記した『水江事略券七 安順公（註・初代邑主）譜下』によると、天和七年八月の項に、
「（佐賀藩）国家当今至極ノ御差支ニ付、大守ヨリ国中ノ諸士ヲシテ反銭反米ヲ出サシメン事ヲ命セラル、我公御同列三家ト仰合ハサレケルハ、今反銭等相掛ラル、ニ於テハ国家弥衰微ニ及ヒ、
国中ノ人氣蓋情落セン、止事ヲ得ス、我々四家ヨリ兩三年ノ間三

分地ヲ差上ケ、国用ヲ補ヒ家中ヲ救ハンヨリ外ナシト申合サレ、各三分地を出サル、爾來終ニ回ラスシテ永ク公田ト成、

此時御当家ヨリ差出サル、処ノ村々

上嘉瀬 砥川 福母 喜佐木 大渡

以上五ヶ村 地米三千四百五十石餘ナリ」

とあつて、多久領主から鍋島本藩へ差出された村の中に福母があり、その移譲の経過が分る。以後『御屋形日記』の中には「御蔵入福母村」として出てくるようになるが、隣接しているので縁組や火災、天災の都度関り合ひは深く続いていた。

大体佐賀藩内で最も早く石炭採掘がなされたのは福母というこ
とになつており、『鉾山沿革調』にも福母坑の沿革に「今ヲ去ル
百年余（年月不詳）発見シ其以來興發存亡、慶応二年ヨリ開業：
：」とあり、初めて福母に石炭が発見されたのは凡そ安永年間と
いうことになる。

然し、宝暦元年十月廿三日福母村源太郎は、至極当然のことの
ように石炭焼を願出て居り、多久邑でもさしたる抵抗もないまま
許可しているのは、既に福母に於ても、多久に於ても石炭焼に関
ることが、それ程珍しいことではなかつたのではないであらうか。
恐らくこれが多久私領内の出来事であつたら、日記の記事として
書き留められる程のことではなかつたのかも知れない。と思うの
は、この宝暦元年を境にして数年間の「御屋形日記」を繰つてみ
たが、遂に類似的の記録に出合わなかつた。先に書いた「草場佩川
日記」の中の大副山採掘の記事も年月を照し合せて調べてみたが
「御屋形日記」の方には書かれていなかったのである。

なお、宝暦一安永よりさらに年代は下るが、文政九年（一八二六）
にジールボルトが江戸の「將軍の居城」へ旅をした際の旅行記『江

戸参府紀行』に、肥前のウクモト（Wukumoto）で炭坑を視察し
た記事が書きとめられており、このウクモトは福母であろうと推定
されている。

執筆者紹介

（掲載順）

田中直樹	日本大学講師（生産工学部）
東定宣	九州大学経済学部助手
秀村選三	九州大学教授（経済学部）
米津三郎	福岡県地方史連絡協議会副会長
町田保次	佐賀行政監察局勤務
今野孝	麻生セメント本社社史資料室勤務
坪内安衛	私設伊万里湾域石炭産業史資料室 （元立川鉾業所労組委員長）
細川章	多久市立図書館司書
入江寿紀	西日本鉄道本社勤務
左合藤三郎	元『日本労務管理年誌』編集委員
金子雨石	田川郷土研究会々員（元貝島炭鉾職員）
今津健治	神戸大学助教授（教養部）
八田千恵子	佐賀新聞社勤務